



こんなことあったよ！ のしろ白神ネットワークの活動レポート

平成 22 年 3 月 7 日(日)
手這坂の第8回「冬まつり」 編

3月7日に8回目となる「冬まつり」を実施した。里にはまったく雪がないことから手這坂の雪の具合が心配であったが、あそこは例外であった。正に「雪だらけ」であった。

今年のロウソクは市内の企業からのいただきもので、今までの4倍長持ちする優れものでその効果は絶大であった。なんと、炎がまばたきをするように見え、ロウソクの炎で風の流れがわかるという何とも神秘的な光景を披露してくれて、駆けつけたアマチュアカメラマンや観客を興奮させ、魅了してくれた。

思えば、平成15年の3月に冬まつりの予備実験として雪灯籠を200個作ったのが始まりであった。足跡のひとつもない真っ白な雪だけの冬を何とか楽しいものにできないかとの試みは、手這坂を幽玄の世界へと変身させ、ロウソクの小さな灯火が演出する冬の夜のイベントとして町民などに親しまれるようになった。

前日の雪灯籠づくりではボランティアが10人以下と少なく、差し入れの豚汁を食べて頑張った。当日は午前中は人出が不足だったが、お昼のだまこもちの時間にはそれなりに人出も多くなっていたのは不思議である。隣町の写真グループや上町の能登さん達も駆けつけてくれて、午後4時まででこれまでの最高記録である2200個を完成できた。

今年の雪灯籠はロウソクが大きいことから、作り方自体にも変更があった。炎の熱で溶けた灯籠の水滴でロウソクが消えることを回避するため、かまぐらのような横穴を止めて器具を使って上から穴を開けるというものにした。バケツもスコップで叩くことから厚手の鉢を使用し、穴を開ける器具は市販の畑で使用しているマルチの穴開け器となった。

これは雪灯籠の進化論である。

文： 嶋津 宣美



だまこもちのおいしさに誘われ、お昼時には参加者が増えました。



雪しかなかった雪原に次々と灯籠が作られていきます。



日が落ちるに連れて、あたりは幻想的な風景に変わっていきます。